2013 年 1 月 26 日（土）13:00 時～16:30 時
第 13 回日中戦争史研究会　於：愛知大学名古屋校舎 厚生棟3階会議室 W32

参加者（五十音順、敬称略）：
有田義弘（愛知大学）　王敬翔（愛知大学）　柴田哲雄（愛知学院大学）　周家形（愛知淑徳大学）
千賀新三郎（一般）　張鴻鵬（名城大学）　永野克彦（永野氏研究会）　野口武（愛知大学）
長谷川怜（学習院大学）　馬場毅（愛知大学）　広中一成（三重大学）　堀井弘一郎（都立国際高校）
前田啓介（読売新聞）　三好章（愛知大学）　森久男（愛知大学）　水田幸雄（放送大学）　安井祐（一般）
楊韜（名古屋大学）　ほか１名

記録作成：野口

報告1：
今井貞夫（人間・栗林忠道と今井武夫を顕彰する会顧問）
「史料整理を通じて得た　新たな父のイメージ；今井武夫関係文書整理の現状と今後」

【報告要旨】
　日中戦争期、陸軍軍人として日中和平工作に携わった今井武夫に関して、ご子息の今井貞夫氏から「父」としてのイメージ像が語られた。今井武夫は昭和 31 年に誕生し、陸軍士官学校 30 期、陸軍大学校 40 期を経て、特に昭和 6 年、支那課・参謀本部員に配属以後、昭和 14 年参謀本部総司令部参謀など配属されると、昭和 16 年西部 63 部隊長となり離任するまで中国認識を深め、汪兆銘政権との和平工作に携わった。報告では和平工作時の情況から、ご子息ならではの家族関係や自宅に残る史料、その整理を通じた今井武夫像、また汪兆銘に対する述懐などが報告された。

【質疑応答】（司会：馬場毅）
馬場：
　今日のお話では、今井武夫氏の略年表をはじめ資料の紹介から、ご家族ならではの話や終戦後の情況などもあり、大変面白く聴かせて頂きました。特に今井氏はお父上のことに関してこれからも研究するご意志があるとのことで、また汪兆銘の日本国内での再評価をつづけていきたいとも伺いました。この中にも同時期の研究をなされています専門家や留学生がいらっしゃいます。ぜひ積極的な質疑をよろしくお願いします。

森：
　今日のご報告から、今井武夫の発想の原点がわかってきました。
　盧溝橋事件以後の関係改善の努力をしていきますが、その発想の根源がどこにあるかという点について、報告からヒントを考えますと、ひとつは中学校から士官学校へ行き、陸軍幼年学校を出ていません。おおむね参謀本部支那課に勤務している支那通軍人というのは幼年学校出身者で視野が狭いというのが多いのですが、（今井は）中学校から士官学校を受験したということで視野の拡がりを感じました。例えば鈴木貞一や今村均らは中学校卒業者ですが、これら他の幼年学校卒業者と比べると肌合いが違う気がしました。
　それから、田代皖一郎と親しい関係にあったとのことですが、田代は支那通でありながら、統制派ではなく皇道派に近い人物です。皇道派の軍人というのは中国関係に積極的に関与して良くしていく、統制派は中国を叩こうという気運が強いかと思うのですが、田代の皇道派的対中国観が強かったのではないかと思いました。
　また、参謀本部支那課に勤務しているものは勇ましい人物が多く、長勇や影佐貞昭、根本博などと近いところで関わっていますね。そこで今井武夫氏の資料のなかで、桜会に関する史料のなかでどのようなものがあるのかということをお聞きしたいと思います。

今井：
　田代さんは皇道派とのことでしたが、田代さんが生きていれば皇道派を押さえられただろう、それから穏健派でもあったというようなことを、今井武夫史料の中のどこかで書いていたと思います。
　それから中学校卒については、幼年学校出の人より、8 ヶ月ほど社会に携わる経験が大きかったと思うので、確かにご指摘の通りかなと思います。中学校卒の出身者のほうが穏やかな気がしていまして、考え方が違うのか

なとも思います。
　桜会については『昭和史の天皇』のなかに松崎氏との対談があります。満州事変の後に、橋本虎之助の調査団に遠藤三郎らと参加した際に、満洲に行って石原莞爾に適当にあしらわれたので怒って帰ってきたというエピソードがあるのですが、帰ってくると朝日新聞の高宮太平が、調査団の皆が拘束されているのに、なぜ拘束されずに早く帰ってきたのだと質問していましたが、何だか話がかみあわずさっぱり分からないと（今井武夫が）言っていました。そんな逸話があります。

森：
　高宮の『軍国太平記』を読むと、統制派には同情的な書き方をしていますね。新聞記者だったので陸軍省に出入りしていて軍人とのやりとりが多かった。

今井：
　高宮とはよく話し相手になっていたようですが、繆斌工作ではソリがあわなかったようです。高宮は朝日新聞の緒方などの繆斌工作を信じていたようですが、父は信じていなかったということを聞いたことがあります。

森：
　影佐貞昭と考えが似ているように見えながら、彼との関係がうまくいっていなかったという話ですが、影佐は 26 期で今井武夫は 30 期だったので年に差があって対等ではなかったと思うのですが。

今井：
　影佐さんには、手紙で感謝している旨や、いろいろ支那班に引っ張ってもらったり、病院にも見舞いをしてもらったり、作業のそぞろ書きをもらったりしていて、関係が悪いわけではありません。そぞろ書きについては、後に原本が影佐さんから家族に送られたことから、みすず書房の資料になった経緯があります。

張：
　私は今井武夫の陸軍参謀本部時代に同僚であった遠藤三郎を研究テーマとしています。今井武夫氏は陸軍士官学校などで遠藤との履歴上の関連性があります。昭和六年三月に参謀本部本部員に支那班とありますがその時から遠藤と同僚だったのでしょうか。

今井：
　いえ、橋本調査団のときに、一緒でした。遠藤は作戦課にいましたので参謀本部員としては同じだとは言えます。調査団のときは遠藤だけ帰ってこられなかったようですね。

張：
　もう一点確認したいのですが、橋本調査団のときに遠藤は残ったわけですが、このとき橋本の役割として当時の関東軍を止める役割であったと思いますが、いかがでしょうか。

今井：
　いいえ、あくまで調査団としての参加で、関東軍を抑止する目的ではなかったと思います。調査に行きましたが、石原のほうが止めに来たのだろうと逆に諌められてしまい、ひとまず陸大の教官をしていたので挨拶しに行ったら、憲兵をつけてやるから動かぬようにしろと言われてしまった、というエピソードがあります。とにかく調査しようとしたが、（関東軍が）調べさせようとしなかった、できなかったということで、当時話が通じるのも本庄司令官だけであったので、（今井武夫は）やりようがないし調査もできないので帰ってしまったということです。

張：
　分かりました。遠藤との記録には若干の違いがあるようです。ありがとうございます。

今井：
　遠藤とも手紙上のやりとりをしています。橋本調査団は別に史料も出ていますね。

張：

それから、満州に派遣された時代についてお伺いしますが、当時、中央参謀本部と昭和天皇は、満洲事変直後に、関東軍の北満での暴走を抑止する意向があったのかどうか、ということをお聞きしたいと思います。

今井:
関東軍と参謀本部の考え方が違っていたとは思いますが、調査に行っただけで、そもそも当初から陰謀であったと気づいていなかったわけですから、現地に行ってみたら逆に目をつけられてしまった。止めようとしたかは分かりませんが、ただ調査に行ったのだと思います。

張:
今井武夫氏と関東軍は意向が一致したのかどうかという点ですが、遠藤は石原と意見が対立して北満出兵には反対しました。しかし、最後には関東軍に翻弄されて、関東軍の意向に従っていきます。満洲事変以後の関東軍に対して今井武夫氏はどのような考えをもっていたのでしょうか。

今井:
満洲の動向についてはよくわかりません。陸軍中央部と関東軍とは考え方が違うとは思いますが。

張:
今井の日中和平工作についてですが、当時の和平工作は参謀本部のなかでどのような影響力があったとお考えでしょうか。例えば陸軍内部でも盧溝橋事変以後、中国一撃論や対中全面戦争不拡大論がありますが。

今井:
少なくとも一撃論ではなかったと思います。すぐ収まると思っていないけれど泥沼化するというのは思っていたでしょうし、しかも上の人間たちは収めたかったはずです。全面戦争を続けたいなんて思っていないし、泥沼化を懸念していたし、戦争をしたがる人間はいなかった。盧溝橋事件の想定も対ソ連のはずでしたから、中国の奥地へどんどん引きずられる泥沼化をさけようとした結果、和平に動いているのは間違いないと思います。

張:
重慶政府に対してや、汪兆銘への桐工作ですが、当時の陸軍内部で、当時の陸軍中央部の意向など、どのように影響力があったのか否かについてお伺いします。

今井:
桐工作は天皇にも上奏されて、天皇にも成功が期待されていたが、結局うまくいきませんでしたね。

堀井:
資料の3ページ目ですが、今井武夫氏が5千点残したとする史料は、この時代を研究するものには非常にありがたい貴重な史料だと思います。その史料についてお伺いします。
東京・内地に、参謀本部に戻ってきたというときもあったようですが、その時に例えば私物(手紙類)は持って帰って来られたと思いますが、公的な資料(桐工作一連の資料など)を持ち帰ることができたのは、その当時に行い得たものなのでしょうか。

今井:
その都度ひもでまとめて持って帰ってきて、家で整理したものです。

堀井:
自宅に留めおくことができたとすれば、可能であった理由はいかなるものであったのでしょうか。

今井:
他の方々は焼失しているようですが、簿冊といっても自分で書いた原稿などを自分で保管していたもので、残しておいたというよりは、責任者として階級が上だったので、ある程度保管できていたのではないかと思います。

堀井:

それから今井武夫氏が書かれた『支那事変の回想』の原文のようなものも紹介されていますが、それらも持ち帰っていたということですね。

今井：
そうです。とにかく書くのが早く、「メモ魔」であったようですね。公的なものがなぜあったのかというのは、実をいうとよくわかりません。

堀井：
資料 5 ページ 3 行目に「追慕」ということで漢奸への贖罪の気持ちが記されています。『支那事変の回想』にも、戦後敗戦になって自分が対日協力者に迷惑をかけたという内容が書いてありました。この点について、日本側が対日工作者を引きずり出そうとしたという責任の意識ですが、これまでそうした活動をした人物から公然とした記事を見たことがありませんでした。今井武夫氏はこれらのことを日記などに書き残していたのでしょうか、それとも誰かに話していたのでしょうか。

今井：
家族には当然話していました。汪兆銘の詩集がありますが、その詩集に対しても、志が詩集の中に生きているといって特別な気持ちがあったようですし、それに工作を始める前から漢奸に仕立てあげるつもりで行動してはいません。ところが日本に連れてきたら公安などが無茶な要求をつきつけてきたし、父や影佐さんが目指した方向とは違ってしまった。それでも最終的に「漢奸」にしてしまったから悪いと思っているのでしょうね。連れてきたときには重光堂会談のときに取り決めたものを活かしてもらえると思っていたでしょうし、謀略などとかいう気持ちではなかったのだと思います。

堀井：
今度出版される日記にはそうした部分が記されているのでしょうか。

今井：
まだ全部読み通せていないのですが、こうした気持ちがあったというのは遺族の立場では言えます。それから日記にはあまり悪いことは書いていませんね。

三好：
「今井日記」を読ませていただいておりますが、昭和 21 年の 6 月から翌22年に長野に帰るまで約 8 ヶ月間、終戦直後のものがあります。その中で、たとえば梁鴻志の処刑に際して、孫文の同志であった人間をこうした結果に至らしめてしまったのは非常に残念であったとひどく悼んでいます。さらに陳群がその前に自殺していますが、梁鴻志ももう少し胆力があればこうした辱めを受けなかっただろうにといって、そうした姿を高く評価しています。汪兆銘に対しては、終戦前にすでに亡くなっていますが、蔣介石が墓を破壊したことに対して慚愧の念に堪えないと言っています。漢奸にしてしまったということについては、日記の中では明白には出てきませんが、ある程度くみとれる部分が出てきます。

堀井：
感想になりますが、戦後日本の「戦争責任」とかの話の中で、たとえば従軍慰安婦ほか話題は沢山あるわけですが、こうした「対日協力政権をうち立てる」ということについて、関わった人材をどのように評価するのかを考える際に、今井武夫氏が残した発言や資料は非常に貴重なものだと思います。

柴田：
汪兆銘政権に関して研究しています。その中で汪兆銘に関わったという点から今井武夫氏の史料も少し引用しました。今日のお話のように詳細に人間の関係性を理解していませんでしたが、この点今後の課題させていただくとして、お聞きしたいのは戦後、今井武夫氏は一体どのように暮らしていたかという点です。

今井：

母親の実家が呉服屋で経済的余裕がありました。ただし、いわゆる「たけのこ生活」でものを売っていたりして、かなり生活は苦しかった。ただ他の家庭に比べて一家の主がいて心強かったですね。
パージが解けてからは、朝鮮戦争の頃から軍人恩給がついて、生活がある程度楽になったのかと思います。
戦後は協同経営していた会社が結局倒産しましたが、軍隊仲間で一緒に会社を起こしたり（日本硫鉄）していますね。

柴田：
では、もうひとつ質問です。たとえば辻政信などは戦後参議院議員に立候補していますが、今井武夫は表舞台には出ようとしなかったのでしょうか。終戦時まだ歳は四〇代でしたし、責任を取るなど自身思うところあったのでしょうか。

今井：
よくわかりません。戦後すぐはとても苦しく、その後も裕福ではありませんでした。姉がモノを得るなどして非常に無理をしていた情況でしたね。

森：
辻との関係です。辻は戦後、軍統の手引きで仏印を脱し、蔣介石の軍事アドバイザーになりますが、戦後、辻とは出会っているのですか。

今井：
会っていますね。日記では褒めてもいませんが、悪くも言っていませんね。

三好
昭和22年８月はじめのころに会っていたと思います。国民党の軍服を着ていきなり現れて驚いたという記述が日記に出てきます。

馬場：
ひとつだけ質問したいと思います。資料3ページ目ですが、呉佩孚、スチュアートなどの和平工作についてですが、具体的には工作史料のなかには和平工作の条件などが記されているものでしょうか。

今井：
それほど和平工作の史料が記されているわけではありません。

報告2：
長谷川怜（学習院大・院 DC）
「戦前における満洲旅行　満洲産業建設学徒研究団を中心に」

【報告要旨】
　日露戦争後、満洲経営の関心を涵養させる必要性からメディア・イベントとして行なわれてきた満洲旅行は、陸軍や文部省の企画によって、中等教育機関以上の学生・教員が修学旅行として多数参加し、満鉄の活動や移民政策などとともに拡大を遂げた。日露戦争後も国民に対して満洲経営を広く告知するために、「満洲旅行」が多く行なわれたが、本報告では、戦前期満洲で行なわれた満洲産業建設学徒研究団の全体の具体的活動・動向を通じて、参加学生の手記などから対満洲観を整理し、また陸軍の事業への対応や判断に対してどのように評価が下されていたのかについて分析がなされた。

【質疑応答】（司会：馬場）
馬場：
　満州国建国以後、満州経営に対する好意的議論を形成させようということで行なわれた修学旅行ですが、満洲産業学徒建設研究会が軍を含め、諸組織が関与してやっていて、そもそもそれがどのようにして組織され、どこに行ったのか、特に学生達の感想も紹介ありました。それから「幻想」との指摘があり、帝国意識への問題も以前から研究史にありましたが、その側面と同時に、日本人の持つ「満人」に対する優越感がどう払拭されていたのかというお話でした。
　東亜同文書院のやっていた「大旅行」との比較してみますと、実施した主体は東亜同文書院という組織で、ここで紹介されている様々な工作機関は関与しておらず、それから「大旅行」はこの時期の中国本土は非常に治安が悪いので、徐々に満洲へシフトしていきます。また大旅行では2、3ヶ月実施する場合もあります。基本的に調査で自動車を使っているのは満州国の方だと思いますが、「大旅行」は馬車や徒歩で動きます。主として商業慣行を調べて、後に『支那省別全誌』として編纂されますが、これらと比較しても本日の報告は非常に面白い点がありました。

森：
　今後の研究としてお聞きしますが、これから包括的な満洲旅行をやりたいのか、それとも別のことをやるのでしょうか。次の研究ステップはどのようなものでしょうか。

長谷川：
　満洲旅行に特化した研究というよりは、満洲経営に携わった組織が、いかに満洲事情を国内に紹介していたかとか、満洲経営に対する好意的与論を形成するためにどのように事業を行なったのか、というところに興味がありまして、そのひとつとして今回のテーマを選択しました。

森：
　満洲旅行というといろいろな可能性がありまして、石光真清の「満洲スパイ調査旅行」というのがあって、義和団事件のころの混乱した情況を実検していますが、そうした日程による調査旅行もあります。それから満鉄のような調査機関による調査もあります。そのなかで満洲国に限定するのでしょうか。

長谷川：
　満州国期に限定するというわけではなくて、日露戦争以後を中心にしてある範囲として捉えています。満洲国期に関してはあまり扱われていなかった点がありあます。

森：
　満鉄調査部の調査報告書には、満洲関係以外の調査報告があります。あの調査報告の背景には当時無数の満洲旅行があったはずで、特別な調査というよりは、どちらかというと軍も協賛したけれども、それほど重きを置いていなかったのではないかというイメージがあります。関東軍の満州国経営に対して深刻な影響を及ぼした調査もあったはずで、そういう方向を見ていくと、もっと内容が拡がっていくのではないでしょうか。

長谷川：
　そうですね。そうすると、やはり学生が政策理念に関わるなどといった問題が必要になりますね。

森：
　言ってみれば、いろいろな機関にお世話になるということですが、東亜同文書院の大旅行でも、訪問先で様々な機関の世話になっています。軍のバックアップなどがあれば満州国のあらゆる場所に行くことができます。調査報告書を少し見せてもらいましたが、行く先々で資料をもらっていて、軍のバックがあるので資料が次々と手に入るわけです。東亜同文書院の大旅行調査も、中国満洲全土に OB のネットワークがあって、彼らが占領地などでも手分けをしてくれたことで、至るところで資料を提供してもらいます。ですので、東亜同文書院の調査報告書とも似ている感じがします。東亜同文書院の調査報告書は公刊されたものがかなり多くあります。それらを参考にするとまた幅が拡がるのではないでしょうか。

長谷川：
　分かりました。ありがとうございます。

今井：
　まず、最初の 1906 年の満洲旅行ではどこからスタートしているのでしょうか。黄海海戦や旅順戦など戦闘が激しいときによく実施できたなと思いますが、どの大戦のときにどこでやったのでしょうか。黄海海戦は 8 月ですが、当時そうした情況で旅行が実施できる状況にあったのでしょうか。

長谷川：
　夏にやったとありますが子細は不明です。実際に満洲に上陸しているわけではなく、遠方から眺め見ているという情況になるのですが、「観戦旅行」と銘を打っていても、海戦の場所を見たわけではなくて、海軍の周辺を旅行してきたものになります。

今井：
　それからもう一点はコメントになりますが、昭和 8 年 7 月から参謀本部附奉天特務機関とあります。この時期は今井武夫も約 5 ヶ月間ほど背後で動いていますので、どういう団体でどういう兼合いがあったのか、関連があれば調べてみたいと思っています。

森：
　写真帳（当日周回配布された資料）を見ますと、もと関東軍政庁の時代の岡村参謀副長をはじめ、主要なスタッフが相当力を入れて協力していますね。武藤葵なども載っており、関東軍がかなり大サービスをしたというイメージがあります。後になると業者が増えてきて、ものめずらしさがなくなるのかもしれないですが。

長谷川：
　外交史料館に「本邦人満洲旅行援助関係雑件」（何冊もあり）というのがあって、とにかくあらゆる学校の先生が満洲に行きたいということで旅費の資金援助を依頼しています。

森：
　陸軍省軍務局の活動を見ていくと、いろいろな業者が金を引き出そうとしてきます。そうした広報活動が一環にあってサービスしていて、陸軍の積極的に組織したというよりは、おそらく軍務局の担当にある種の業務として存在したのではないでしょうか。

堀井：
　学徒研究団の活動は全く知りませんでしたので興味深かったです。東亜同文書院の学生たちは学生たちだ

けで基本的に行動したと思いますが、この満洲の場合では、我々の知っている修学旅行のように教員の先導があったのでしょうか、それとも学生たちだけで調査するような行動場面があったのでしょうか。

長谷川
　はい。一ヶ月の行程の内、中 2 週間は自分たちで行動する期間が設けられています。東亜同文書院の場合はひとつの学校で、ひとつの学生たちなので（団体としての）まとまりがあるのですが、満洲旅行の場合は、全国から千名ほど集まっているので、学生だけで行って来いといっても、なかなかまとまれないという情況でして、その中から選考で、2 週間ほど農村や工場などの見学に行きます。そこに必ず教師はついていっていますが、どの程度教師が関わるのかは不明です。ある程度学生の意志のおもむくまま過ごしていたのだとは思います。

堀井：
　そうすると、実際に満洲の現地の人たちや暮らしに、学生が生で触れあう機会、見聞する機会はどのようなものであったのでしょうか。あくまで「お膳立て」されたなかでの調査旅行だったのでしょうか。感想文などにも出てきますが、日本人官僚がいわゆる「満人」を馬鹿にするような場面があって、そうした感想を目にします。一方で単に友好意識だとか満洲に対する好意的意見なども出てきますが、これはいわゆる「五族協和」的な範囲のなかでの受け止め方であって、根底的にそうした受け止め方とは異なる、批判的なものの見方などの片鱗が、公文書には出てこないとしても、回顧録・インタヴュー記事などに出てくるのではないかと思います。この点をお伺いしたいと思います。

長谷川：
　満洲旅行に参加したなかで、名前が残る人物もいますが、現時点でそこまでの調べには至っていません。分かり次第まとめたいと思います。
　また現地で触れあう機会としては、2 週間に分かれた団体行動のなかではグループによっては一般家庭に泊まったということもあったようです。

堀井：
　たとえば、建国大学の学生たちは、いわゆる満州人や中国人など、現地の暮らしの中で葛藤があったというのが出てきますが、満洲旅行に行った学生たちにも、何か満洲に対して「芽生えるもの」があれば視線が拡がるのではないかと思いました。

広中：
　レジュメ3ページですが、満洲産業建設学徒研究団が 33 年 8 月から始まって38年に終わるとあります。なぜこの時期に始まったのかというのが疑問です。この少し後に石原莞爾が中央に入って、ソ連に対抗するための産業開発 5 カ年計画を38年頃から始めてゆきますが、この時期に学徒研究団の活動が終了してしまっています。日本軍がそれぞれ考えた満洲の産業政策と対比させると、話の関連性が見えるのではないでしょうか。
　それから、史料の5ページですが、広田弘毅が「お金を払わない」と言い出しますが、広田はこの研究団を有益と思っているのでしょうが、日中関係が良かろうが悪かろうが、満洲に行くのはそもそも日満関係好転に値します。たしかに日中関係は広田によって良くはなるということですが、話の糸口が別にある気もしますが、いかがでしょうか。

長谷川：
　一点目はおっしゃるとおりで、国内を宣伝したというだけではそれだけになるのでもう少し整理したいと思います。

広中：
　東亜同文書院の学生は満洲事変のあたりから、関東軍のトラックなどに乗って旅行するなど、軍と絡んでいます。結局、やっていることが同文書院生と大差ありません。特に違いのある特徴というのがいまいち分かりません。

長谷川：
　国内向けの宣伝としては、大きな講演会などでかなり行なわれます。もちろん現地で見てきたことを将来に活かしてほしいという点もあるのですが、満洲国への理解につなげたいという、キャンペーンのような事業だという理解をしています。

三好：
　質問です。まず、大学横断的に学生を集めていますね。修学旅行といえばそうですが、修学旅行の教育的目的として、自分の住んでいるところ、あるいは活動範囲を幼い内から認識させるという点が挙げられます。現在でも小学校の低学年から地理の延長上線に修学旅行というものが出てきて（80 年代頃までの日本はそうだった）、日本全国を体験させるということが出てきます。
　それが、日露戦争直後にやられたとするならば、修学旅行を実施したのが当時の第二世代であって、そこから気づく点が出てきます。建設学徒研究団は 1930 年代ですから、次の世代として出てきます。というのは、この前後には、羅津から大連に向けて帰ってきたり、釜山から経由して新潟、舞鶴と戻ってきたりする修学旅行がなされていて、このツアーのコース自体は別段、目新しいものではないということです。ですから、満洲国が出来上がった後の問題と当然絡むであろうということです。
　中学校や女学生ではないので、報告書としてはしっかりした内容で、なおかつ事前に調査して、終わった後に調査研究でもしなければ執筆できないような資料や材料で書かれているので、それを意図した政策的目的もあったはずだと思うのですが、先ほどの森先生のコメントでは軍の関与が薄いとのことですが、この点どうなっているのか不明です。
　もうひとつは、学生の選抜が、旧帝大などのエリートをピックアップしていて、あらかじめ配属将校など軍の関与があったとしても、予め軍のエリートが選ばれるというのが前提として決まっていたのではないかということです。千人程度としては旅行団体としてはかなりの規模ですが、これは全国からピックアップしていくということを考えると、全国に配属将校として配属されるときにも、彼らは軍事訓練を行なって、行動訓練ができていますので、軍の指示にも従いやすいという側面が理解できると思います。大学の配属将校の役割についてはよく分からないのですが、これについて調べたことがあるのでしょうか。中等学校や高等学校に配属される将校にランクの違いがあったのか、やはり大学、中高とランクが違うようには思いますが、この点いかがでしょうか。
　それから、3 つ目に、JTB の話が出てきますが、同時期には新京の忠霊塔参観が目玉のツアーにあって、満鉄も一枚かんだ観光旅行をやっています。旅行者などが増えていくというと、そうした業者の増加と JTB などの組織との関係はどうだったのかというのを質問したいと思います。

長谷川：
　まず、配属将校ですが、大学でのランクや教育という点については、今まで視点が及びませんでした。エリートを選抜することが決まっていたというのは、そのとおりで、学校から声をかけたという背景があると思うのですが、あくまで募集をかけてきた学生を選ぶということなので、この点をどう判断すればよいのかいまだ区別をつけていません。

三好：
　そうすると、どこに広告を張り出したのでしょうか。おそらく大学構内に告知したと思うのですが、帝大や商大など、張り出す場所が選ばれていたかもしれません。

長谷川：
　告知に関しては、学校宛にとある財団法人が書類を送って声をかけたということが資料にはあったのですが、ポスターを貼りだしたかどうかまでは分かりません。
　JTB との関連ですが、この事業に関しては民間のものは一切入っていません。移動に関してもすべて陸軍やその他組織が手配していますし、関東軍と満鉄が金を負担しています。満鉄の公報協会の史料にアクセスすると出てくるかもしれません。

馬場：
　3ページの林毅陸についてですが、彼は慶應の塾長を務めた後、東亜同文会の役員、戦後は愛知大学の初代学長となりました。同文会でも役員を務めていますし、大旅行についても知っているはずです。ただし、慶應の塾長の資格として入ったのか、どういう役割を果たしたのかを調べると、東亜同文書院との関連が分かるかもしれません。
　東亜同文書院との調査の関係ですが、まず 1920 年代までの調査は上海市の公安局に許可証を発行しても

らって、調査地にそれを見せると保護してもらえます。その際に匪賊など出たりして治安が悪い場合は、県長配下の地方の軍隊が（保護に）ついてくれます。ところが 30 年代になると、上海市公安局が国民政府下ですから、満州国の存在を認めませんし、日本との関係も悪く、許可証を出してくれません。そうすると結局、満洲国の関係のところに行って許可証を出してもらいます。軍隊については、関東軍正規軍がつくということではなく、非常に治安が悪ければそういうこともあるかもしれませんが、県長付属の保安隊がつくもこともありますし、基本的にはその程度で自分たちで勝手に動きます。例外的に戦争状態や治安が悪ければつくだろうと思います。

それから、大旅行についてですが、これは卒業研究を行なうための調査になります。彼らは旅館に泊まるときの手配や条件などで苦労するのですが、移動は徒歩や馬車で移動するケースのほうが多い。それで現地で調査する場合は、先ほど森先生がご指摘したとおり、東亜同文書院のネットワークの助けがあったということはあります。これは県長に保護してもらうという役割と同じで、そうした助けがないと調査できません。

また経営母体の東亜同文会は最初から戦争中まで外務省の外郭資金が入ってきます。ただしそれ以外の資金は自分たちで運用するしかないので、その点は外務省が手を抜いたというところは検証が必要です。

藤田佳久先生が、大旅行に関して本をまとめています。それを対照されると面白いかなと思います。同文書院は基本的には学生たちが卒業研究で集めた資料で報告をなします。満洲の部分を参照されると参考になると思いますが、一般的な修学旅行と大旅行は異質だと思いますので検討が必要に思います。

王：

今日の報告から当時の満洲旅行キャンペーンとして、 多くの人を送り込んで旅行あるいは調査し、日本に対する満洲認識につなげたとのことですが、もう少し（他地域に）視野を拡げた場合、朝鮮や台湾についてはどうであったのでしょうか。当時の朝鮮や台湾への移民政策は進んでいますし、当時のこれら朝鮮、台湾、樺太などの地域を視野に入れてみてはどうかという質問です。

長谷川：

朝鮮に関しては、満韓として一緒に行く場合が多いです。満洲に関しては、まず日本の領土ではないということで、力を入れ方が異なっています。樺太については調べてみましたが、あまり事例がありません。ただ、いくつかはあって、夏休みの長期期間を利用して有志で集まって樺太へ調査旅行に行くという事例があります。

森：

1933 年に満州国へ行って大歓迎されたというのは時代的背景があって、32 年 8 月関東軍参謀部の主要メンバーが総入れ替えになって、石原色に染まった理想国家を創ろうとする参謀たちがみなパージされてしまって、陸軍中央を中心とする新参謀スタッフが送られてきます。それ以降、日満関係の緊密化、満州国経営の正規化が行なわれていきます。日満関係強化前提のもと大々的に満州国を育成して、その方針が軌道に乗るのが 33 年以降なので、学生たちが行くと、参謀長、副長がみな奉仕するというのは、35 年になると満州国の経営がシステム化されてきますので、学生たちを歓迎する必要性がなくなっていくのだと思います。

千人という人数が毎年くるというのは、満洲国のスタッフもとられるわけで大変です。物見遊山なら簡単でしょうが、調査となると世話をするのが大変です。それらをふまえて訪問先を考えると、しぼんでいったというイメージを持ちます。

長谷川：

分かりました。時代背景を追った上で確認したいと思います。

三好：

写真を見ると、東日の記者がついてきますね。新聞社との関係はどうですか。宣伝するならば、新聞社は関連するのでないでしょうか。

長谷川：

その点も確認してみたいと思います。

張:
　最初の旅行が日露戦争のころで、33 年 9 月にも実施したとのことですが、各時代の背景として日露戦争のときも大陸政策がありますし、30 年代初期も石原莞爾の満蒙経営論などが背景にあります。今日のお話でこれらの点について影響力は考えられるでしょうか。

長谷川:
　日露戦争直後ですが、新たに日本の勢力範囲に入った地域なので、その地域を人々に見てもらおうとする意識があったのだと思います。1930 年代になると、ある程度日本の勢力が浸透しているので、今後満洲にどうやって産業を開発するのかといった問題など方向性が変化しています。

張:
　もうひとつ、33 年頃の満洲農業など各産業の 5 カ年計画があって、開拓団の派遣があります。当時の研究団の派遣は、開拓民との接触があったのかどうかをお伺いします。

長谷川:
　ありました。開拓団の村に行って、そこでどのような農業を行なっているのかを見るというのがあります。現地の邦人との交流も様々な面で行なわれています。

以上